

# 厚木市史たより

第29号

令和5年(2023)11月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

現在の私たちの暮らしを映す鏡

『厚木市史 古代通史編』

大東文化大学 文学部 歴史文化学科

教授 宮瀧 交二

はじめに

厚木市民の皆さんはもとより、神奈川県民、ひいては日本の古代史に関心をお持ちの皆さんも待ちに待っていた待望の『厚木市史 古代通史編』がついに刊行された。早速、胸の高鳴りを抑えながら、そのページをめくってみると、この二十一世紀に暮らす私たちでさえ、大いに共感を覚える千数百年前の厚木地に暮らした人たちの暮らしが、そこにはつぶさに記されていた。考えてみると、私たちの日々の暮らしは、現在のもとより過去



図1 『厚木市史 古代通史編』

のどの時代にあっても、異常気象や地震・火山噴火といった自然災害に見舞われ、また、時代時代の政治や経済の変化にも直面し、翻弄されながらも、堅実に継続されてきた。つまり、先人たちは、このような暮らしの大小の変化に対して真摯に向き合い、必ずその時々課題を克服して、揺るがない日常生活を維持してきたのであった。

『厚木市史 古代通史編』は、今まで知り得なかった様々な歴史事実に溢れており、読むだけで実に面白い。しかしながら、それだけにとどまらず、ここに解き明かされた古代の人たちの暮らしは、実は現在の私たちの暮らしを映す鏡でもあり、また、将来を映す鏡にもなっているのである。換言すれば、『厚木市史 古代通史編』を一読することで、私たちは単に過去を知るだけではなく、そこに現在の私たちの暮らし、そしてその将来を展望することができるのである。

それでは、まず最初に『厚木市史 古代通史編』の構成を目次から見ておくことにしたい。

## 第一章 古墳時代の厚木

- 第一節 弥生時代から古墳時代へ／第二節 厚木と周辺地域における古墳／第三節 古墳時代の集落と生活／第四節 相模国造と丹沢南東麓の古墳／第五節 ヤマトタケルの東征と厚木

## 第二章 相模国愛甲郡の成立

- 第一節 律令国家の地方支配／第二節

相模国・愛甲郡の交通／第三節 愛甲郡

周辺の豪族と支配拠点

## 第三章 愛甲の古代社会

第一節 村のくらしと生業／第二節 いのりとまじない

## 第四章 古代社会のさらなる探究

第一節 発掘された文字資料と古代社会／第二節 災害と古代社会／第三節 中

世への胎動

## 付編 遺跡補遺

『厚木市史 古代通史編』は、その名の通り通史編であるが、執筆の根拠となつている文献資料や考古資料等を収載した『厚木市史 古代資料編(1)』『同 古代資料編(2)』は、それぞれ本編に先立って平成五年(一九九三)、平成十年(一九九八)に刊行されており、爾来今回の通史編の刊行までに四半世紀以上の時間が経過している。この間に、厚木市内外の古代遺跡の発掘調査等が進み、古代資料がめざましく新たに蓄積されたことは言うまでもなく、今回の通史編の巻末には、一三〇余ページに及ぶ「付編 遺跡補遺」が加えられ、古代資料編の補遺を果たしている。

## 古墳時代のくらし

第一章・第二節では、古墳時代の厚木の歴史が記されている。古墳時代は前方後円墳が登場した前期(三世紀後半～四世紀)、中期(五世紀)、後期(六世紀)、終末期(七世紀)の



四期に時期区分されているが、全国各地でそれぞれの地域を支配していた首長層が、大陸・半島との外交関係を背景に倭国の国内支配を確立し始めていたヤマト政権との同盟関係を結び、その表象としての前方後円墳を築造し始めたこの時期に、厚木にも前方後円墳が築造されていることから、この厚木の地を支配していた首長（リーダー）は、ヤマト政権と直接・間接に結んだ新たな政治的・経済的関係を背景にして古墳時代の相模川流域の支配を構築・継続していたとみられる。ところが、中期・後期には前方後円墳は築かれなくなり、また後期に登場する群集墳（かつての首長より下位の有力家族墓とみられている）にも、地域社会の権力者であったことを示す威信財（鏡や武器・武具等）の副葬品は見られなという。前期にあつて相模川流域を支配していたとみられる厚木の地の首長はその立場を失い、その後は代わって伊勢原の地の首長がその責を果たしていたのではないかという見解が示されている。後頁に『国造本紀』が載せる「相武国造」の検討もあるので、両者の関係についての言及が無かつた点は惜しまれる。

続く第三節では、各時期の集落遺跡の発掘調査の成果から、古墳時代の人たちの暮らしの復原が試みられている。これまでに把握された前期の集落は五九地点であるが、中期すなわち五世紀になるとその数は二一地点と前期の半数以下に減少し、また後期になると八〇地点へと増加するという。この中期における集落数の減少傾向は、「大地震」「火山噴火」に伴う人口減少であると説明されているが、残念なことに、本書にはこの「大地震」「火山噴火」に関

するこれ以上の記述がない。人口が減少するほどの大災害であるとすれば、それは当然ながら厚木の地に限つてのことではない広域的な災害であつたと思われるので、他地域の様相も参照しながらの説得的な記述が欲しかったところである。第四章・第二節には奈良・平安時代にこの厚木の地を見舞つた自然災害についての詳細な記述もあるので、古墳時代の記述においても「大地震」「火山噴火」の概要を示して欲しかった。いずれにしても、この中期の人口減少が自然災害に起因するものであつたとすれば、後期までに厚木の地に暮らした人たちは、かつての生活を徐々に取り戻したことになる。こうした先人のたくましさは、今私たちが学ぶことは少なくない。

また、ここでは、古墳時代の集落遺跡から出土した遺物が紹介されている。木製の農具（鍬）や鉄製の農具（鎌）・工具（斧、鑿、鑿他）の存在から復原される古墳時代の暮らし、特に生業について、もう少し踏み込んだ記述が欲しかった。厚木の地に暮らした古墳時代の人たちが、どのような生業を営み、何を着て、何を食べて暮らしていたのか、例えば遺跡の発掘調査成果の報告に際しては、土壌分析（花粉分析やプラントオパール分析等）により、当時の植生環境の復原等も行われているはずであり、その検討結果も通史の記述に反映できたのではないだろうか。

### 奈良・平安時代の暮らし

続く第二章（第四章）では、奈良・平安時代の厚木の歴史が記されている。まず第二章・第一節では、

七世紀後半に「大王」から「天皇」となった天武天皇・持統天皇が初めて本格的な令（飛鳥浄御原令）を制定し、律令を屋台骨とした国家を形成しつつあつた中で、厚木の地が相模国愛甲郡に編成されたことを、文献史学と考古学の最新の研究成果から検証している。特に古墳時代の相武国造の支配領域が、鮎河評・大任評・高倉評を経て、愛甲郡・大住郡・高座郡となつたこと、また十世紀前半に編纂された辞書である『和名類聚抄』が、愛甲郡に六つの郷の存在を載せているがその比定地を発掘された奈良・平安時代の集落遺跡の分布から分析・推定できたことは、今回の通史編で公表された大きな成果である。続く第二節では、今日、日本古代史研究にあつて最も研究の進展がめざましい古代の交通史、特に古代相模国と愛甲郡を取り巻く交通史に関する最新の研究成果の記述にかなりのページが割かれている。古代の厚木の地に暮らした人たちの暮らしを考える上での歴史的な環境（生活の条件）がここまで明らかになってきたことに驚かされるとともに、こうした成果が、厚木の地に暮らした人たちの暮らしの実態解明に、今後、



図2 峯ヶ谷戸遺跡出土投網土錘・鉄錘  
厚木市教育委員会『あつぎの遺跡展  
峯ヶ谷戸遺跡』1996年



大きく貢献していくことを期待したい。そして第三節では、愛甲郡の政治的・経済的拠点となっていたであろう愛甲郡の郡役所、すなわち愛甲郡家の所在地について、考古学の最新の研究成果から検討が加えられている。また、その愛甲郡家で地方政治を主導していた郡の役人、すなわち郡司を努めていたであろう壬生直氏に関する文献史学からの検討成果も記されている。

そして、この通史編の最も重要なテーマである、古代の厚木の地に暮らした人たちの暮らしが描かれているのが第三章である。特に「第一節 村のくらしと生業」に収められている「村の一年」に描かれている当時の人たちの暮らしは、今日、厚木市民の方々はもとより、その周辺地域に暮らす方々に



図3 鮎の塩焼き

とって見逃す（読み逃す？）ことのできない記述となっている。そこに記されているように、当時の若い男女が将来の伴侶と出会ったであろう歌垣の場は、厚木の地では飯山だったかもしれないし、市内峯ヶ谷戸遺跡からは投網漁に用いたとみられる錘も出土しており（図2）、夏の農作業の後の楽しみは、当時鮎川と呼ばれていたであろう相模川で捕れた新鮮な鮎の塩焼き（図3）に舌鼓を打つことだったのではないだろうか。文中で紹介されているように、石川県加賀遺跡から出土した勝示札は（図4）、加賀国加賀郡の郡司が農民に示した制札であるが、飲酒を禁止していることから、時に農民たちが深酒をして問題を起こしていたことがうかがわれる。鮎の塩焼きを肴にちよつと一杯という、厚木の地ならではの「夏の愉しみ」は、千三百年前から、いやもつと前から続くものなのかもしれない。また、『万葉集』に湯河原温泉が歌われているように、当時の人たちも私たちと同じように温泉を楽しんでいたようである。ここに記されているように、古代の人たちも「厚木の湯」を楽しんでいたのだろうか。

ところで、高等学校の日本史教科書には奈良時代の農民の生活を紹介する史料として、未だに『万葉集』に収められている山上憶良の「貧窮問答歌」が掲載されている。しかしながら、近年の研究により、ここに描かれている農民の厳しい生活は、日本の実態を描いたものではなく、入唐した憶良が接した唐の詩人の作品に由来するフィクションであることが明らかになっている。この「貧窮問答歌」から導かれる古代の農民の姿は、もはや何の希望もなく疲弊しきった農民の姿である。ところが、この第三章・

第一節に描かれた古代の厚木の地に暮らした人たちの生き生きとした暮らしは、「貧窮問答歌」から導かれるそれとは正反対のものである。かつて夏目漱石は、長塚節の小説『土』に登場する農民の生活を「蛆同様に憐れな百姓の生活」と評したが（夏目漱石『土』に就て）、「長塚節『土』の序 春陽堂一九二二年）、これに対してドイツ文学者・小説家の中野孝次は、「『土』に見るような）現実描写がただ悲惨としか感じられぬとしたら、その原因は長塚節の把握の仕方の中にか、現実そのものの中にか、どちらかにあるのであろう」とした上で、「長

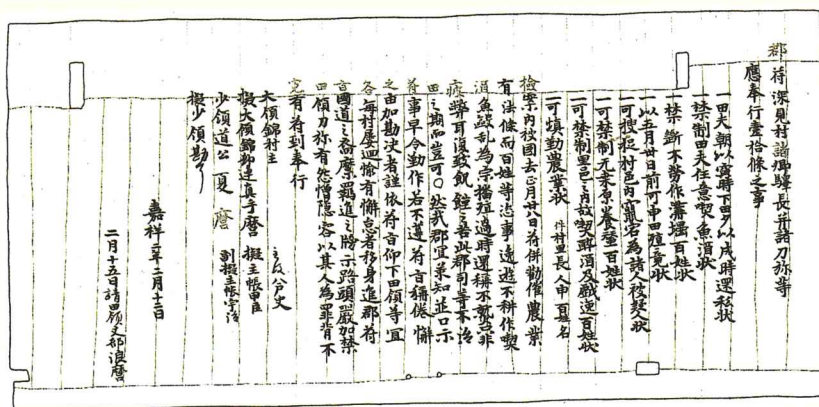


図4 石川県加賀遺跡出土加賀郡勝示札復元図  
平川南監修『発見！古代のお触れ書き』大修館書店 2001年



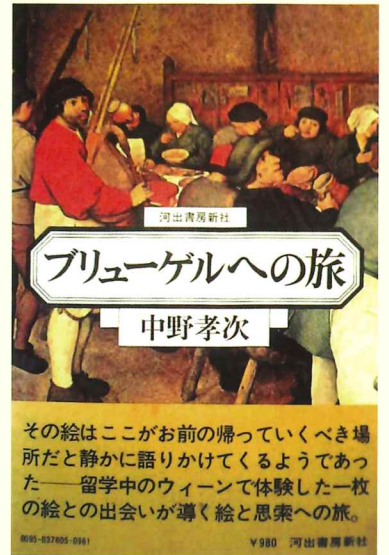


図5 中野孝次『ブリューゲルへの旅』

塚節自身の思想」に原因を認めて「いかにそれが質朴、悲惨であつても、人間はそれだけでは生きられない」「少なくとも、幾百万の農民が代々そういう「虫けら」同然の生活だけに耐えてこられたと想像するのは、都会人の傲慢であろう。何かが、なんらかの本当の救済と安心がそこにあつたはずである」と述べ、農民たちの「本当の救済と安心」を描ききれなかつた長塚や、それを「土」の背後に見出し得なかつた漱石の「傲慢」さを指摘しているが（中野孝次『ブリューゲルへの旅』図5）、全く同感である。彼らの暮らしは、それは厳しいものであつたと思われるが、今回、この通史編で示された、歌垣で恋に落ち、捕れたての鮎の塩焼きに舌鼓を打ち、温泉で労働の疲れを癒やしたであろう先人たちの姿に、むしろ私たちは憧憬を抱くのではないだろうか。古代の厚木の地に暮らした人々と、他者への関心、そして共感も持たず、日々、殺伐とした社会に暮らす私たちと、どちらが本当に人間らしい暮らしをしているのだろうか、そして、幸せなのだろうか。

続く第三章・第二節は、こうした古代の人たちの暮らしを精神的に支えた、仏教信仰・神祇信仰を関

連資料から丁寧にたどっている。そして第四章では、第一節で、現在の古代史研究にあつて新たな文献史料であると同時に考古資料でもある遺跡出土文字資料と、その役割について、そして第二節では、従来の自治体史では全く等閑視されてきた当該期の自然災害の実態とその影響についてページを割いている。こうした記述は、他地域の自治体史では、まだほとんど言及されていないテーマであり、本書の大きな特色となつている。そして最後の第三節では、本書に続く中世通史編への架橋作業が行われ、見事に竣工している。

### まとめにかえて

このように本書は、現在知られている、厚木の地の古代史に関わる文献史学、考古学、歴史地理学、美術史学、古環境学ほかの研究成果が見事に総合され、従来の自治体史の古代通史の叙述を大きく変えた（豊かにした）点において、厚木市民の皆さんはもとより、神奈川県民、日本の古代史に関心をお持ちの皆さんにも是非とも手に取っていただきたい一書となつている。ジェンダーの視点からの叙述や、子ども史、障がい者史といった角度からの叙述など、まだまだ、古代の暮らしを知るためにアプローチすべき課題もあるが、根拠となる史・資料の不足等から、今回はその叙述が見送られたのだと思われる。こうした今後に課せられた作業が、次世代の研究者へと継承され、いつの日にか厚木の古代史像が更に豊かになり、それに伴って、厚木市民の皆さんの現在そして将来の暮らしもまた豊かになることを確信

して、まとめに代えたい。

### 〈引用・参考文献〉

- 夏目漱石 『「土」に就て』 長塚節「土」の序 春陽堂 一九一二年  
 中野孝次 『ブリューゲルへの旅』 河出書房新社 一九七六年  
 厚木市教育委員会 『あつぎの遺跡展 峯ヶ谷戸遺跡』 一九九六年  
 平川南監修 『発見！古代のお触れ書き』 「石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札復元図」 大修館書店 二〇〇一年

### 既刊厚木市史一覧

厚木市史	地形地質編・原始編	価格6,000円
厚木市史	古代資料編(1)	5,700円
厚木市史	古代資料編(2)	7,140円
厚木市史	中世資料編	5,700円
厚木市史	中世通史編	6,130円
厚木市史	近世資料編(1)社寺	5,600円
厚木市史	近世資料編(2)村落1	5,700円
厚木市史	近世資料編(3)文化文芸	2,490円
厚木市史	近世資料編(4)村落2	3,570円
厚木市史	近世資料編(5)村落3 荻野山中藩	2,690円
厚木市史	近世資料編(6)村むらと生活	6,710円
厚木市史	民俗編(1)生活記録集	5,110円
厚木市史	民俗編(2)村の暮らし	5,500円
厚木市史	近代資料編(1)	9,090円
厚木市史	古代通史編	9,000円

\*厚木市役所本庁舎3階市政情報コーナー・あつぎ郷土博物館にて発売中

### 厚木市史たより 第29号

令和五年（二〇二三）十一月一日発行  
 編集 厚木市教育委員会文化財保護課  
 発行 厚木市  
 住所 神奈川県厚木市中町三一七―一七  
 電話 〇四六一二二五―二〇六〇  
 FAX 〇四六一二二三―〇〇八六

『厚木市史たより』は厚木市ホームページにも掲載しております。